



# オアシス

文責：副学長  
桑原雅次

出雲芸術アカデミーだより 2019年9月9日発行 第17号

今年の夏は、前半は猛暑に見舞われましたが、お盆を過ぎたころからは天候不順が続き、各地で豪雨被害が発生していることに胸が痛みます。最近の気候変動は地球環境の悪化が主な原因と考えられますが、私たちも身の回りのことから節電を心掛けるなど、一人一人が環境問題に関心を持つことが大切に思います。環境問題は気候変動だけでなく、ゴミの問題も深刻です。なるべく生活ゴミを少なくすることや、使いまわしができるものは率先して活用していくことが未来の地球を守る行動につながると思います…。

## ◎ 北九州市 Jr.オーケストラを視察してきました！

来年の4月5日（日）、北九州芸術劇場に於いて、北九州市 Jr.オーケストラと出雲 Jr.フィルとの交流演奏会が決定しています。先日、北九州市 Jr.オケの定期演奏会が開催されるにあたり、出雲芸術アカデミーから職員が挨拶を兼ねて視察をすることとなり、私も便乗させていただきました。その感想を一部ですが紹介します。

北九州市は100万人近くの人口を有する政令指定都市です。八幡製鉄所がある九州の玄関口としても古くから栄えた中核都市です。会場の芸術劇場は JR 小倉駅にほど近い商業地区のビル内にありました。各種テナントやオフィスが入る雑居ビルで多くの人々が訪れる環境の中にあり、大ホールは1269名が収容できる3階まである構造でした。北九州市 Jr.オケは1981年の発足で、38年の歴史があるオーケストラです。定期演奏会は毎年開催され、その他にもチャリティーコンサートや各地で3年おきに開催される「ジュニアオーケストラ・フェスティバル」にも初回から参加され、全国の公立ジュニアオーケストラとの交流も積極的に推進されています。小4から高2までの団員約100名からなる構成員で、今回の定期演奏会が開催されました。

プログラムは、◆ニコライ作曲／歌劇「ウィンザーの陽気な女房たち」序曲 ◆チャイコフスキー作曲／スラブ行進曲 ◆ドヴォルザーク作曲／交響曲第8番ト長調 の3曲。

演奏を聴いての感想は、団員が曲目ごとに入れ替わり、約80名の演奏者は迫力のある表現で観衆を魅了していました。メンバーは、意外にも男性の団員が多く、出雲 Jr.フィルとの景色の違いが印象に残りました。大きな違いはもう一つあり、北九州市が大きくかかわっていることと、Jr.フィルの練習場として北九州市芸術文化振興財団が入居している10階建てのビルの9・10階部分を貸し切り、合奏室や練習室が充実している点です。周囲を気にせず思いきり練習できる環境がそろっていることに感銘を受けた次第です。

来年の4月には、私たち出雲 Jr.フィルがオーケストラと合唱で訪問し、北九州市 Jr.オーケストラと交流します。前回の東広島市 Jr.オーケストラとの交流を生かし、演奏を通



芸術劇場の外観



開演前のステージ



本番で熱演

して仲間同士の絆がさらに広まるよう努力したいものです。

## ◎ レコードが充実してきました！

本アカデミーに「ライブラリー」があるのはご承知のとおりです。CDについては、自由に閲覧ができますが、LPレコードはオーディオ機器が故障していたこともあり、長い間放置状態でした。



この度、オーディオ機器を修理し、レコード鑑賞ができる環境が整いました。そうしたところに、市内にお住いの有志の方から、660枚にも及ぶクラシック音楽と吹奏楽関係のレコードを寄贈していただきました。また、旧出雲市図書館（今市町）に所蔵されていたクラシックを始めとする大量のレコードが、現在の出雲中央図書館に保管されており、有効活用できるよう本アカデミーへの無償譲渡が決定しました。既存の600枚のレコードに先日寄贈いただいた660枚、そして出雲市から無償譲渡されるとおよそ2000枚のレコードが本アカデミーの所蔵品となります。整理が大変ですが、鑑賞会ができるように有効活用をしていきたいと思っております。

このデジタルの時代に何故レコードなのか…。と不思議にお思いになる方も多いのではないのでしょうか…。オーディオ機器の修理が整うと早速レコードを聴いてみました。なんと、とても素晴らしい音質・音響で奏でる音色に立ち尽くしてしまいました。レコードには技術の粋を尽くした録音が施されているのですが、一般には再生機器の不備で再生不十分の状態で聴いていることが多いのです。本アカデミーの機器は、出雲フィル創設期の音楽監督である“川上 昇”氏の寄贈によるものですが、これこそが高級オーディオ機器なのです。レコード録音の素晴らしさがいかんなく発揮されていますので、一度鑑賞してみてください。

## つぶやき

教育界では、新学習指導要領の完全実施が来年度から小学校を皮切りに始まり、2021年度は中学校、2022年度に高等学校と順次実施されます。気になったことは、高校の国語で「文学」が選択科目になることです。現代国語といえば小説や詩歌、評論が主なものと思っていましたが大きな変化となりそうです…。教育改革に沿った試験問題例には、実用文として「行政のガイドライン」や「駐車場の契約書」が出ているのだとか…。これからの国語教育はこういうことになるのかと一抹の不安を覚えます。教科書で文学に出合わないとしたら一生出合うことがなくなる可能性もあるわけです。文学の良さは、「広い世界へ行くためのドア」になるのだと、ある作家の言葉です。また、自分の狭い世界、狭い価値観から解放されるのが文学であるとも語っています。

救いは、「アクティブラーニング」が推奨されることです。アクティブラーニングとは、学習者が受け身ではなく、自ら能動的に学びに向かう学習法です。教育も「受ける」ことから「自ら求める」ことに方向転換されるわけです。個々が何を求めるかが問われることでもあり、大きな転換期と言えるのかも知れません…。その点、芸術の世界では、以前から自己が求めなければ何も始まらないことで定着しています。芸術の精神がこれからの時代に変革をもたらすのではと期待しているところです。

【このたよりは、本アカデミーホームページでも掲載します <https://www.izumo-zaidan.jp/academy/>】